

# 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 久野 量一 印

学位申請者 宮入 亮

論 文 名 両利きの抵抗——ジョアン・カブラウ・ジ・メロ・ネトの作品における「人間的な」詩の実践とノルデスチの抵抗

## 【審査結果】

久野量一を主査とし、武田千香、前田和泉、トイダ・エレナ（外部委員）、福嶋伸洋（外部委員）から成る審査委員会は、2024年3月16日に上記論文の審査並びに口述による最終試験を行った。その結果、審査委員会は全員一致で、申請者に対し博士（学術）の学位を授与するのが適当であるとの結論に達した。

## 【論文の概要】

本論文の目的はジョアン・カブラウ・ジ・メロ・ネトの詩とノルデスチ（ブラジル北東部）がどのような問題に関係しているのかを解釈することである。

彼の詩は初期の段階からノルデスチを扱っているわけではないが、その段階において確立する詩作の方法は後にノルデスチの問題と関わっている。そのため、前半の一章と二章においてはカブラウが詩作についての問題をどのように扱ったのかが明らかにされ、後半の三章から五章にかけて、詩の問題とノルデスチの問題がどのように関係しているのかが扱われる。

一章では、最も初期の作品にあたる詩集『眠りの石』（*Pedra do sono*）、散文詩「片思いの三人」（*Três mal-amados*）、詩集『技師』（*O engenheiro*）において、どのようにカブラウの詩作の基礎が定まっていたのかが明らかにされる。『眠りの石』は内面や夢の無制限な世界を展開する詩を含む詩集であったが、「片思いの三人」においてはそうした詩作が相対化されている。『眠りの石』の手法とは対照的な、身体によって知覚可能な世界を構築するという手法は、「片思いの三人」においてあらわれ始め、『技師』で優位に立つ。

二章では、「アンフィオンの寓話」（*Fábula de Anfion*）、「構成の心理学」（*Psicologia da composição*）、「反頌歌」（*Antiode*）という三つの作品から成る彼の転換点となる『構成の心理学』（*Psicologia da composição*）においてカブラウの詩作の方法がいかに確立されたかを読み解く。この作品集はカブラウの詩においてノルデスチが扱われるようになる直前の段階にあたり、『技師』より戦略的に詩における問題への批判を展開している。詩に

において生じる神秘化は受容を阻む問題とされ、そうした問題に対して「否定詩学のトリプティック」とも呼ばれる『構成の心理学』は詩作の人間化を確立していくことになる。

三章では、カブラウの作品とノルデスチが全般的にどのように関わっているのかが明らかにされる。ノルデスチを特徴づけている対照的な地理空間は乾燥したセルタンと湿潤な砂糖黍地帯であり、これらの地理空間はカブラウの詩を特徴づける要素にもなっている。加えて、それぞれの地理空間は貧困という問題を抱えており、カブラウの作品に先行してそうした主題を扱った文学作品が 1930 年代に書かれていた。後の 1945 年代には、そうしたブラジルの特定の問題ではなく詩の一般的な問題を追求しようとする詩人たちがあらわれ、カブラウもその一人に数えられていた。カブラウ自身はそうした詩の問題だけを追求する態度を批判し、詩の問題と貧困に代表される地域の問題を合わせて追及することを選択している。このように、カブラウは彼なりの形でノルデスチの対照的な地理空間、詩の問題と貧困を詩のなかで統合しようとしていたことがわかる。

四章では、ノルデスチの貧困を扱い、「カピバリベのトリプティック」とも呼ばれるカブラウの最も有名な三作品『羽のない犬』（*O cão sem plumas*）、『川』（*O rio*）、『セヴェリーノの死と生』（*Morte e vida severina*）において、詩の問題と貧困がどのように扱われているのかが明らかにされる。これらの作品は文学あるいは文化が無関心、隠蔽、神秘化によって貧困を助長し得ることを暴露している。こうした問題の解決のためには詩と貧困の人間化が必要になることが作中に読み取れる。加えて、これらの三作品は貧困によって分断される読者に対応するために、『羽のない犬』を「読むための詩」、『川』と『セヴェリーノの死と生』を「聞くための詩」に分類する『二分水』（*Duas águas*）という 1956 年当時までの全集に収められている。これらの三作品とこの分類基準を含んだ全集の関係は、研究者や批評家によって議論されているが、一般的な受容の問題において評価されている。しかし、こうした分類基準に沿った作品群は分断されたノルデスチに対応し、統合を目指そうとした試みであると解釈することもできる。

五章では、「カピバリベのトリプティック」の延長線上にあり、ノルデスチの貧困をより包括的・総合的に批判しようとする試みである「フウイヌム国」（*The Country of the Houyhnhnms*）と『修道士の戯曲』（*Auto do frade*）をどのように解釈できるかが明らかにされる。これらの作品は分断されたノルデスチの人々の関係自体を批判的に捉えるもので、支配する側だけでなく支配される側にも統合を阻む問題があることを示している。統合の阻害は、ノルデスチにおいても、文学の受容においても、支配と従属の関係の固定化によって引き起こされ、そうした関係自体を神秘化せずに人間によって変えることができるということをカブラウのこれらの作品は示している。

結論として、カブラウの創作は詩の問題とノルデスチの問題を互いに関連する問題として扱っていたということが出来る。そのため、詩の問題とノルデスチの問題を同時に批判的に扱う彼の創作は両利きの抵抗と呼ぶことができ、二つの問題に対しては人間的な詩の

実践とノルデスチの統合が目指されていた。両方の問題が関わり合っているように、それに対する二つの試みも関係し合っている。人間的な詩の実践はノルデスチの統合に結びつき得るものであり、ノルデスチの統合は人間的な詩の実践をさらに展開させ得るものである。

#### 【審査の概要及び評価】

最終試験の場では、冒頭、学位申請者によって本論文の概要が説明された。続いて、各審査委員会より本文を評価できる点として、次の点が挙げられた。

- ① ブラジル文学の中でも、きわめて難解といわれる詩人ジョアン・カブラウ・ジ・メロ・ネットが詩作を通して目指したものを特定するという挑戦的な課題を、学術的な研究に結実させたこと。
- ② 先行研究では、「詩作に対する問題意識」と「ノルデスチに対する問題意識」という別個に論じられていた議論を、「両利きの抵抗」という新たな観点によって包括的に論じたこと。
- ③ 初期から後期まで、広い時代にわたる幅広い作品を対象に、テキストの解釈に根ざして説得的に論じていること。また分析にあたって、文学・芸術理論のみならず哲学や歴史学、社会学、建築学、教育学等の研究を駆使し、一般に流布しているイメージ、すなわち人間味を排した頭腦的・理知的・技巧的な作風が先行しがちなイメージを覆す詩学を明らかにしていること。

一方で、以下のような問題点も指摘された。

- ① 論文でキーワードとなる、「両利き」「人間的」「人間化」「身体化」といったいくつかの用語の選択とその背景や妥当性については、先行研究あるいは同時代のブラジルの知識人たちが展開していた議論の経緯などを踏まえて慎重に検討し、論じる必要があったのではないか。
- ② 引用されたカブラウの詩の日本語訳のいくつかについては、文法的な解釈や語義の解釈をめぐって、検討の余地が必要な箇所が残っているのではないか。
- ③ 議論の展開にはやや冗長な部分が見られ、細部の指摘がその後回収されていない箇所も見受けられる。より凝縮し、密度の高い記述を目指すべきではなかったのか。

宮入氏は審査員の指摘や質問に対して丁寧に応答し、問題点については適切な回答が得られ、至らなかった点についても十分に自覚的であることがうかがえた。詩の解釈をめぐっては、多義的な読みの可能性が開かれていることが審査を通じて明らかになり、そう

した審査員との応答を通じ、宮入氏がブラジル文学のみならず、ブラジルに関する諸学問、隣接する地域の文学に通暁していることも示された。また宮入氏が、本論文における問題点の解決も含めた今後の研究課題に取り組むことも明らかにされた。

#### 【総合評価】

以上の論文評価及び最終試験での質疑応答の内容から、本論文がブラジル詩人の文学的営為に関する優れた研究であることを確認した。よって審査委員会は、冒頭で述べたとおり、全員一致で、申請者に博士（学術）の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。